

◆連載-Vol.37

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948年神奈川県生まれ。
1971年千葉大学建築学科卒業、
『住宅特集』『新建築』編集長を
経て1994年からフリー編集
者。1999年～2014年千葉大
学客員教授。

新たな建築表現を求めて その4

山本理顕 本質を問う

1977年に完成した山本理顕の「山川山荘」は、刺激的なプランニングであったにもかかわらず、発表当時はあまり高い評価を受けなかった。まだまだモダンリビング的な住宅が主流だったからだろう。

しかし、山本がここで主張したのは、モダンリビングを根底から覆す提案だった。当時も今も、住宅は居間が中心となっている。施主のニーズはこうだ。居間を中心に置けば家族全員がそこを通ることになる。だから必ず顔を合せられるし会話もできる、と。

一方で建築家も、居間はある意味ではセミパブリックなスペースで、家族が集うし、客が来ればここで接待できる、という理論だ。それを否定する山本の発想はどこからきたのか。

1945年、終戦の年に北京で生まれ、2年後に引き上げてきて以来、横浜育ちの山本は、日本大学を卒業すると東京藝術大学大学院に進み、修了後は東京大学生産技術研究所原広司研究室の研究生となる。そこで行ったヨーロッパからアフリカにかけての集落調査が、住宅、家族、共同体などのあり方について考察を深める機会となったようだ。詳しい内容は山本の本を読んで欲しい。

そこから導き出されたのが、山本がよく使う「ひょうたん型」の空間ヒエラルキーだ。個室をひとつの単位として、表が外の世界だとすれば、個室から直に表につながり、個室の背後に家族の居間がある、という構造である。

戸建て住宅ならば建て売りだろうがプレハブであろうが、個室はすべて居間に続き、居間から外へ出るような定型化したパターンが、いまの日本では当然のように受け入れられている。居間を中心に置くプランニングでは、家族間のコミュニケーションが取れるとは言うものの、実質的には強制であり、子どもにとっては常時監視されていることになる。そう言いながらも個室を与えることが自立につながると信じている。家族のお互いの関係も曖昧になっている。高齢になったオジサンオバアサンのためには南側の陽当たりのいい部屋を用意するのだが、ある意味では隔離状態である。

日本にはかつて家長がいた。男尊女卑の世界である。どんなしがないサラリーマンであっても、家に帰れば家長であるとふんぞり返っていた時代があった。ところが民主主義の世の中になって、さらには核家族化(死語か? 現在では当た

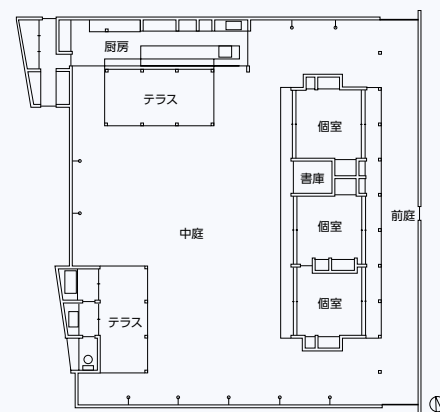
り前である)した現代、家族がどのような関係になるのか、考えもせずに日常の暮らしは流されてきたと言える。

家族という単位はどうなっているのか。かつて学生に「君の家族は誰?」と質問したことがある。答えは単純で、同居している親族だけである。例えば「両親と兄弟」というのが圧倒的。その学生に、「今後、君が結婚して家を出てしまったら、両親や兄弟は家族ではないの?」と重ねて聞くとパニックに陥る。これが核家族の実態である。

山本が集落調査で得た経験から、都市における集住の方法として、そこに集う人々を緩やかにまとめる「ルーフ」という概念を導き出した。ルーフの下で暮らす人々を家族としてとらえたらどうか。ただし、古典的な意味での家族ではない。山本が提唱する極めて現代的な家族であり、未だコンセンサスを得いてるわけではない。

家族、あるいは親子という、ある意味では無批判にとらえてきた関係性を、それぞれを人格のある個人としてとらえ直し、それが同居するという図式を山本は提案する。家族であるために壁で囲まれた枠の中に押し込められる必要はない。離れていても家族のハズ。「スープの冷めない距離」という言い方もある。

1986年に完成した自宅、「GAZEBO」は、最上階が山本の自邸となっており、中央部のコートを含んで、山川山荘のように食堂や浴室、寝室が分散的に配置されている。1988年の「HAMLET」では4世帯のそれぞれの部屋をジャングルジムのようなグリッドの中に散在させた。隣り合う部屋があっても、違う家族の誰かがそこにいるのである。そしてそこにテフロン膜の屋根を架けた。「ルーフ」である。その最終形が1992年の「岡山の住宅」だろう。ひとつの敷地の中に、



「岡山の住宅」1階平面図

住宅の諸機能を分棟として計画した。図面からもわかるように個室群の前が玄関とされている。家族それぞれが直接外の社会、家族とは異なった社会集団、父親の会社、子どもたちの学校、母親の地域活動などともつながることが可能なのである。「岡山の家」の1年前に完成した「熊本県保田窪第一団地」(1991)にも、この空間構成が用いられている。ただし、戸建てでは個室とされた基本ユニットが、ここでは各住戸として、個室の背後に置かれた居間が中庭として、同じヒエラルキーで拡大される。

この流れとは違ったところに、一連の「緑園都市計画」がある。ディベロッパーが多くの建築家に依頼しながらも地権者の同意が得られず、長い間立ち往生していた案件である。これをやり遂げたのが山本だった。山本が提案したのはひとつのルールだった。細長い敷地の長手に面した広い表通りと、それと平行する裏通りがあり、その間をいくつかのパスで結びというもの。これが受け入れられた理由を、ひとつにはパスのおかげで店舗が道路に面する面積が増えたこと。さらには具体的な形態の提案をせず、建物としては単純なRCラーメンとしたことを山本は挙げていた。もちろん、上層部は立体的な街路空間となっており、山本の面目躍如たるものがあるが、これまでの建築家たちの提案が、施主にとっては恣意的な形態の押しつけと感じられ、それに対する反発だったと推察できる。あくまでも推察であるが。



「熊本県保田窪第一団地」出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)

その後、山本は建物のデザインから恣意性を排除する方向に転じたように思える。1999年の「埼玉県立大学」ではプレキャストコンクリートに取り組む。プレキャストのメリットは工期の短縮、施工時の天候に左右されない品質の安定性、人工の削減や工期の短縮による経済性など、さまざまに言われるが、山本が評価したのは「誤差が1mm前後」と言っていた、その精度である。続く「公立ほこだて未来大学」(2000)ではPCの使用率が大幅に増えたものの、基礎だけは現場施工で対応しなければならなかった。そして「横須賀美術館」(2007)、「ナミックス・テクノコア」(2008)、「天津図書館」(2012)へと、改めてデザイン表現に重点を置くようになる。

結果として表れる建物の形態に変化はあるものの、基本的な姿勢は崩していない。アприオリにあるものに対して根源的な疑問を投げかける。これは世の中が当然としてきたもの、言い換えれば無批判に受け入れてきたものに対する問いかけであり、そこに矛盾や曖昧性があるならば矯正する。あくまでも現代の視点で。常識や道徳が時代とともに変化するものであるならば、当然行わなければならない検証作業であるのだが、われわれは往々にしてそれを忘れてしまう。

山本理顕がモダンリビングという形骸化した住形式に対して突きつけたアンチテーゼは、建築家として取るべきひとつの姿勢であろう。(続く)

上/「埼玉県立大学」出典: 近代建築 2000年6月号
下/「横須賀美術館」出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)